

日本植物園協会ナショナルコレクション申請書

新規申請

更新申請(認定番号 015 認定期間 2023 年 3 月 17 日～2028 年 3 月 16 日)

(いずれかに)

■申請年月日 2022 年 11 月 21 日

■コレクションのテーマ

小田急山のホテル 庭園のシャクナゲ

■申請団体・申請者名

小田急電鉄株式会社

■申請団体の代表者名(個人での申請の場合は不要)

非公開

■申請団体・申請者の連絡先(住所、電話、メールアドレス)

非公開

■コレクションの所在地(コレクションが分散している場合は主たる所在地)

小田急 山のホテル 庭園

〒250-0522 神奈川県足柄下郡箱根町元箱根 80

■現地審査希望時期

2022 年 12 月 1 日 ～2022 年 12 月 23 日

希望する理由: 来年度の認定を目指しているため、降雪期前の調査を希望する。開花期ではないが、品種は写真等で確認可能。

■コレクションのテーマ

小田急山のホテル 庭園のシャクナゲ

■コレクションの概要

多くのシャクナゲ野生種はツツジと比較して標高の高い山地に生えるため、園芸が流行した江戸時代にも日本では栽培されることはほとんどなく、品種改良も行われなかった。一方、海外ではプラントハンターによって、19世紀半ばに現在の栽培品種のもととなった観賞価値の高い野生種がヒマラヤや中国からヨーロッパに導入された。特に夏冷涼で冬は比較的温暖なイギリスは、シャクナゲの栽培に適した気候であったため、盛んに交配育種が行われ、現在の栽培品種の礎が築かれた。これらヨーロッパで改良されたシャクナゲは西洋シャクナゲと呼ばれる。日本では、明治時代後期には少数の栽培品種がヨーロッパから輸入されたが、栽培や増殖が難しかったため、国内で販売されることはほとんどなかった。その後、昭和初期に第一次のシャクナゲのブームが起き、昭和10年(1935年)には西洋シャクナゲに日本独自の名称(以降、和名と表記)が20種類以上につけられ、昭和60年代(1985-1989年)まで使われていたが、現在は使用されていない。

「躑躅・臯月・石楠花」(1974, 講談社)によれば『明治も極く末期に、英国及びオランダで作出された交配種のうち、その当時一般的と思われた品種が、数百本程、岩崎小彌太氏によって輸入されたようである。(中略)これがわが国への洋種シャクナゲの最も古い導入ではないかと考えられるが、上記のホテル(注:山のホテル)では今でも「ゴーマー・ウォータラー」という当時のシャクナゲが元気よく生き残っている。』とある。

この西洋シャクナゲ(洋種シャクナゲ)は、三菱財閥4代目総帥岩崎小彌太の父2代目総帥岩崎彌之助(1851-1907)により当初輸入されたようで、1906年(明治39年)にオランダから輸入された書類が残っている。輸送途中、赤道近くで枯れてしまうなど失敗し、何度か試みたようであるが、最終的にはヨーロッパから船で大西洋を回り北米東海岸に陸揚げし、鉄道でアメリカを横断し、再び船で太平洋を運び、北海道に陸揚げして、数年道内(詳細場所不明)で育成したようである(元三菱広報委員会:原徳三氏談)。彌之助の死後、これらの西洋シャクナゲは岩崎小彌太に引き継がれ、東京都世田谷区岡本の岩崎家霊廟と小彌太の箱根別邸(現在の山のホテル)に植栽されたと考えられる。

この別邸は元箱根に1911年(明治44年)に建築され、ツツジ園(現在16,500㎡)と日本で最初と思われるシャクナゲ園(約3,300㎡)が造園された。

1948年(昭和23年)、別邸の建物やシャクナゲ園も当時の状態で「山のホテル」が開業した。前述のように岩崎小彌太が日本で最も早く導入したと言われる西洋シャクナゲの‘ゴーマー・ウォータラー’が現在も残っており、またそれと同程度の大きさで、現在はほとんど栽培がない、明治時代までに海外で作出された貴重な古品種が9品種植栽されており、これらは岩崎家が所有していた戦前に植栽されたものと考えられる。その後1986~1990年(昭和61年~平成2年)にかけ、西洋シャクナゲ約100株、日本産シャクナゲ約50株を購入した記録が近年見つかった。1996~1998年(平成8年~10年)にかけても約100株が植栽されたようであり、結果現在の約300株に至っている。

2016年から5年にわたり、倉重祐二氏(当時新潟県立植物園園長)を中心にシャクナゲ園の調査を行い、42種類の多様なシャクナゲが良好な生育状態で現存していることが明らかになった。

岩崎小彌太が庭園を造園してから100年以上が経過し、樹高5m以上の大きさに成長しているものもあり、その他もほとんどが3m以上の大株である。標高約700mという冷涼な気候のためか病害

虫による被害も少なく、良好な状態で個体が残されてきたと考えられる。日本に最初に導入された‘ゴーマー・ウォータラー’（和名：大華殿）をはじめとして、江戸時代末期から明治時代に海外で作出され、昭和初期に和名のつけられた西洋シャクナゲの貴重な古品種 9 種類が保存されており、栽培例の少ないアマギシャクナゲや環境省の絶滅危惧種に指定されているキョウマルシャクナゲ、ホソバシャクナゲの大株が 50 以上植栽されている。42 種類の当コレクションは、日本で最初のシャクナゲ園に由来するコレクションとして、同じ庭園にあるナショナルコレクション認定のツツジとともに次世代に残すべき価値あるコレクションである。

■申請者が保有するコレクションの種数、品種数、個体数（保有植物リストおよび写真は、別紙「保有植物リスト・写真ファイル作成要領」にしたがい提出）

- ・野生種 12 種類（シャクナゲ亜属：日本産野生種 6 種 5 変種中 4 種 2 変種、ヒカゲツツジ亜属：日本産 4 種中 1 種）
 - アズマシャクナゲ（5）
 - アマギシャクナゲ（4）
 - キョウマルシャクナゲ※（51）
 - ツクシシャクナゲ（3）
 - ヒカゲツツジ（6）ヒカゲツツジ亜属
 - ホソバシャクナゲ※（7）
 - ヤクシマシャクナゲ（13）
 - アカボシシャクナゲ（2）
 - ロードデンドロン・デコルム（1）
 - ロードデンドロン・デコルム亜種ディアプレペス※（1）
 - ロードデンドロン・フォーチュネイ（35）
 - ロードデンドロン・ポンティクム（2）
- ・栽培品種 30 種類
 - アーサー・ベッドフォード（1）
 - アーボレウム交配種（5）
 - アール・オブ・アスロン※（3）
 - アイベリーズ・スカーレット（2）
 - アンナ・ローズ・ホイットニー（43）
 - ウイリアム・オースティン〔和名：競艶・きょうえん〕※（4）
 - ウイリアム・キング（1）
 - ゴーマー・ウォータラー〔和名：大華殿・たいかでん〕※（1）
 - ジーン・マリー・ド・モンタギュー（3）
 - ジョン・ウォルター〔和名：神苑・しんえん〕※（1）
 - シルバー・ジュビリー（1）
 - シルビア 21（2）
 - ステラ〔和名：花競・はなぎそい〕※（3）
 - 太陽（3）
 - ダッチェス・オブ・エジンバラ〔和名：暁光・ぎょうこう〕※（2）

タマリンドス (1)
ノバ・ゼンブラ※ (13)
パープル・スプレnder (1)
バルカン (12)
ハロペアナム〔和名:酔翁・すいおう〕※ (1)
ピーター・コスター (1)
ピンク・パール〔和名:天賜・てんし〕※ (3)
フィリス・コーン (3)
プレジデント・ルーズベルト (1)
ホワイト・スワン (11)
マイケル・ウォータラー〔和名:照姫・てるひめ〕※ (4)
ミニチュア・ピンク (1)
リージェント (4)
ルイ・パスツール (1)
ロード・ロバーツ〔和名:緋の扇・ひのおうぎ〕※ (2)

- ・品種名は The International Rhododendron Register and Checklist Second Edition (2004, Royal Horticultural Society)に拠る
- ・品種名の後の()内は個体数
- ※:全国的に生産、栽培が少ない希少種、希少品種(新潟県立植物園の調査による;未発表)

■申請するコレクションのこれまで報告されている総数と申請者が保有する数

- ・野生種:ツツジ属シャクナゲ亜属シャクナゲ節 302 種中 12 種、ツツジ属ヒカゲツツジ亜属ヒカゲツツジ節 211 種中 1 種保有
- ・栽培品種:5,000(以上)品種中 30 品種保有

※野生種の種数は The Genus Rhododendron its classification & synonymy (1996, Royal Botanic Garden Edinburgh)、栽培品種数は Rhododendron Hybrids (1992, Timber Press) に拠る

■コレクションの栽培管理状況(所在地が分散している場合は、ここに全てを列記)

今回申請するコレクションはすべて山のホテル庭園に植栽されている。

庭園のシャクナゲの手入れは、年間を通して 5 名のホテルの庭園専任スタッフが行っている。最高の大株は 5m 以上の高さがあるので、花柄摘みや年 4 回の消毒などは外部の園芸業者に依頼するが、下草刈り、冬の防風ネット張り、雪降ろしなど、基本はホテルの庭園担当専任スタッフがすべて行っている。

■コレクションの導入記録及びデータベース化の状況

岩崎小彌太別邸時代の作庭、シャクナゲの導入記録は現在までの調査では確認されていない。ただ、概要でも前述したとおり、日本で一番古い西洋シャクナゲを含め、戦前に導入された株が現存しているものと思われる。その後、別邸当時から株の一部が昭和 20 年代後半に他施設に譲渡されたという話は口伝えで残っているが正式な記録はない。

譲渡後に約 30 株の大株が残っていたようで、その後 1986~1990 年にかけて、西洋シャクナゲ約

100株、日本産シャクナゲ約50株を購入した記録が近年見つかった。1996～1998年にかけても約100株が植栽された。

2016年から庭園プロジェクトの一環として、5年にわたり、倉重祐二氏(当時新潟県立植物園園長)を中心に品種調査を行った。品種調査は、開花しているシャクナゲの花付きの枝を採取し1品種ごとに花や萼、花柄等の形質を調査し、それぞれの花の正面、側面の写真も撮影した。その後、文献等で、品種を同定し、倉重氏を通して海外の研究者にも同定を依頼した。

2010年頃から庭園内のシャクナゲに個体識別番号をつけていたが不完全だったので、2016年の品種調査までにこれを完成させ、CADでシャクナゲすべての植栽地図を制作し、5年にわたる品種調査の結果を植栽台帳としてデータベース化した。データベースは、Excelを基本としたQPTシステムを採用し各個体のデータ(エリア、識別番号、品種名、読み、特徴、亜属、節、野生種・栽培品種の区別、調査状況等)と開花時の写真が連動したものとなっている。各個体の写真は、開花時の花の正面、側面、株全体、個体識別番号札の4点を基本としている。(2022年10月現在約9割完成)

※QPTシステムは、Excelを基本とした膨大な資料を把握し活用する目録システム。画像とテキストを連動させて、対象資料等(コンテンツ)を整理・活用できる。

■コレクションのラベル表記状況(栽培管理用ラベルや展示用サイン・ラベルなど)

管理用には、エリア番号と個体識別番号をアルミ複合版(厚さ3mm 70×30mm)のプレートに打刻印を打ち込み、2mmのカラーワイヤーを付け、各個体の根元に取り付け、植栽管理地図と共に管理している。

来園者に向けては、代表的な品種で、なお且つ園路沿いの個体37株に、A5サイズの展示用樹名板を設置している。樹名板には品種名(漢字表記・ひらがな表記)、学名、科名、特徴の説明文、ホームページの写真を含む花の情報を案内するQRコードを表示している。2022年12月現在23品種37個体。

また、同じく来園者用に、年間手入れ、品種紹介、維持再生プロジェクトに関する説明等、庭園内にそれぞれ案内看板(1000×1500mm)を設置している。

■コレクションへの協力団体・協力者(種名の同定、導入など)

○品種調査

倉重祐二(新潟県立植物園 顧問)

Davis Millais (イギリス Millais Nursery)

Rama Lopez-Rivera (International Chair - RHS Rhododendron, Camellia & Magnolia Group)

○年間手入れ

有限会社堂畑造園工務所(花柄摘み、消毒など)

株式会社ランドフローラ(土壌改良など)

○増殖

新潟県立植物園

有限会社 香花園(新潟県新潟市)

■コレクションの長期保存のための方策と体制(増殖、栽培管理上の工夫、栽培技術者や後継者の育成、危険分散等)

○植栽情報管理

シャクナゲ庭園を変わらぬ姿で次世代に残すため、2015 年度より、山のホテル庭園プロジェクトをホテルとして実施。庭園内のシャクナゲすべてに個体認識番号をつけ、個体管理地図を作成。個体それぞれの花の写真を撮影しその他の情報とともにデータベース化。

○増殖

貴重な品種の接ぎ木による個体増殖を図っている。これには、新潟の花弁農家の協力を得て、2015 年に 2 品種、2017 年に 9 品種行った。3 年ほど育てた苗木をホテルで引き取り、圃場で育成している。2022 年 10 月現在 11 品種、約 100 株。

○移植

特定の生育旺盛な種類が大きく育って樹陰を作っているため生育の遅い古品種などが阻害されてきており、このまま放置すると貴重な品種が減少する恐れがあるとアドバイスを受けたので、2017 年 12 月、様々な品種の大株 10 株を庭園内の別の場所に試験移植をした。移植した 10 株は今のところ順調に生育しているので、将来的にシャクナゲ園の増床も視野に入れ検討している。

○後継者の育成

コレクションの管理を担当するスタッフはあくまでホテルマンとして入社したスタッフだが、このメインスタッフに関しては、長年人事異動を行わず、長期間庭園担当として、代々引き継いでいる。また、コレクションへの理解促進のため毎年開花後のお礼肥作業はホテルや本社スタッフ総出で行う。特に、新入社員はこれに全員参加して、シャクナゲへの愛着醸成に役立てている。

■コレクションの公開の現状と今後の方針、これまでの広報・利用実績(研究等を含む)

○公開の現状

毎年 5 月開花時には、ホテル宿泊者だけでなく、「つつじ・しゃくなげフェア」として一般に庭園を開放している。これは、昭和 40 年頃から行われている。近年は、開花時につつじ・シャクナゲの歴史や庭園のシャクナゲについてなど、倉重祐二氏による講演会も開催している。

○これまでの広報

シャクナゲ・つつじの開花期は、1990 年から、テレビ取材を誘致したり、ホテル独自に動画やドローン撮影を行い、テレビ局に配信したりして、さまざまな番組で紹介されてきた。また、ブログは 2014 年から、インスタグラムは 2018 年から開始し、年間を通して庭園の手入れなどの情報を週 2 回くらいの頻度で配信して、庭園ファン作りをしている。

従来、同じ庭園内のつつじだけが有名であったが、つつじ・シャクナゲが同時期に開花するので、開花期に庭園を訪れた来園者に、2021 年から園内見学を一方通行で奥にあるシャクナゲ園まで誘導したところ、その認知が高まった。

○今後の方針

近年の調査で、貴重な品種が数多く存在することが判明したので、これらの品種を含め庭園の景観を維持していくことが重要と考えている。また、ホテルの庭園なので、ホテルに来館されるお客様へのおもてなしのひとつとしても大切な財産ととらえている。

2022 年には庭園維持管理のためのクラウドファンディングも行い、これらの貴重なコレクションの存在を広く PR し、ファンづくりに努めている。毎年 5 月の開花時には今後も「つつじ・しゃくなげフェア」を開催し、一般開放し広く PR していく予定。